

その後の「アンデスの人魚」(ファイルド研究ノート)

加藤 薫

はじめに

筆者は一九九八年に「アンデスの人魚」というタイトルの研究ノートを「麒麟」第七号(神奈川大学経営学部、一九九八年三月)に寄稿した。その抜刷を筆者の所属している「ラテンアメリカ・スペイン美術史研究会」所属会員の一部に配布した所、アルト・ペルー地域における共同研究実施の計画が持ち上がり、日本学術振興会所轄の科学研究費申請に至った。幸運にも「基盤研究(B)(3)(海外)」のひとつに採択され、三年間に及ぶペルー・日本の国際共同調査研究が可能となった。その概要は、南米における銀の一大産出地であったポトシ市(ポリビア)を中心に、北はりマ市(ペルー)まで、南はブエノスアイレス市(アルゼンチン)までアンデス高地を貫く通称「銀の道」と呼ばれてきた街道沿いに散在する植民地時代の建造物(廃棄されたものも多い)の調査で、美術研究の対象としてまだ未着手の分野である。二〇〇〇

年(平成十二年)は初年度調査対象とせずペルーを設定した。ちなみに次年度(平成十三年)はポリビア、最終年度はパラグアイ北部とアルゼンチン北部にまたがる地域のファイルド調査及び収集資料公開への作業を計画している。初年度のファイルドとしてペルーを選んだ理由は、共同研究者にペルー人がいたこと、日本側研究者も人脈と土地勘があったこと、ある程度の基礎資料がすでに手元に存在したこと、などが挙げられる。また調査に付随するコミュニケーション、輸送手段や宿泊施設、物品調達などの手配が比較的容易であったことも要因のひとつであった。初年度ということもあり、立ち上げ時期に伴う混乱やトラブルを最小限に抑えておきたかったからである。

共同研究者は以下の四名。(順不同)

岡田裕成(福井大学教育地域科学部・助教授)

斎藤 晃(国立民族学博物館・助手)

ナタリア・マイルフ

(ペルー国立リマ美術館主任研究員)

ルイス・エドワルド・ウファルデン

(インディペンデント・キュレーター)

但し、斎藤は英国オックスフォード大学にての文献調査、マイルフはペルー側での行政組織、教会組織への事前交渉、書類申請などの裏方業務に専念し、ウファルデンは個人的事情から多忙のため調査予定地の情報収集に限定された協力活動のみで実質二年目よりの参加となった。従って本年度については実際にフィールド調査に参加したのは岡田と加藤のみだったが、負担軽減を図るためフィールドでは次の二名の協力を仰いだ。

北野 謙 (フリー写真家 日本在住)

ベルタ・ベルミユデス・ソマリョア

(クスコ大学大学院生：人類学専攻、クスコ在)

従ってフィールドでは基本的に加藤、岡田、北野、ベルタの四人が一チームとして活動し、この他に運転手、ガイドなどが随時交代で参加した。ベルタはフィールド調査経験も豊富でしかもケチュア語に堪能であり、得がたい人材であった。北野は現代メキシコ壁画写真をライフワークとする若手写真家で、特に撮影条件の悪い屋内の壁画撮影に経験があるため、当プロジェクトの記録撮影には適任であった。

調査概要

チーム調査期間は二〇〇〇年八月十九日より九月二日までの三四日間だったが、岡田は八月十一日よりペルー入りし、あいさつ、必要書類の作成・提出、交渉案件をまとめ、十四日からクスコ市に移動し同様の作業と文献調査を開始し、またベルタとの契約内容を詰めた。加藤は八月十七日よりリマ市内で独自の調査研究を行った後十九日に岡田と合流した。北野が合流したのは八月二三日で、翌日よりフルメンバーでの活動が開始された。

ペルーでの問題は移動時間であった。標高三千から四千メートルという山岳高地に散在する調査予定地間の移動は平地地図からは簡単に予測できない。直線距離にして二十キロしかない距離でも未舗装道路を使って山を乗り越え、谷まで下ってまた登るといふ上下移動に手間取り二時間以上かかるような例ばかりで、調査員の高度順応ということも含め決して容易なものではなかった。予算の都合もあって普通の二輪駆動のステーションワゴンを利用したこともあったが、目的地まで後数キロという地点で冠水した道路をどうしても渡れずに往復四時間を無駄にした事もあった。車高の高い四輪駆動車の確保は必至というのが教訓である。

ペルーは南半球にあるため日本と夏冬が逆転する。八

月はペルーは真冬だが、雨が降らないという点から調査には最適の季節である。日中の日差しは強く気温も十五度前後まで上り、屋外での撮影作業では時折Tシャツ一枚になることもあったが、調査地は全て高地で大気汚染もない辺鄙な場所ばかりなので紫外線の影響をまともに受け、肌荒れ対策を忘れると大変なことになった。冬期なので日没は早く、午後四時には撮影を終わらせる必要があった。このため調査地への出発時間はいきおい早くなり、超朝型生活となる。また夜間は急激に温度が下がり、氷点下になることもしばしばだったので体調管理にも気をつかった。季節が冬であるということはまた自然の風景も冬景色に限定される。耕地に緑はなく、川や沼の水も干上がっていて砂漠のような白茶けた乾燥大地しか見えない。従って未舗装道路の埃もひどく、撮影機材の灰埃対策は調査の死活問題となるだけに細心の注意を払うこととなった。

調査予定地の分布は「銀の道」沿いにペルー国内だけで南北でゆうに五百キロを越える範囲にあった。そこで効率よく調査を実施するためフィールドを以下のように八つのゾーンに区分した。

- (一) リマ市内及び近郊。
- (二) クスコ市内
- (三) クスコ以北のバリエ・サグラドス地域。

(四) クスコ以南で日帰り距離限界であるウルコスまでの地域。

(五) ラ・ラヤ峠以南からフリアカ市内を経てプーノ市までの地域。

(六) プーノ市以南のボリビア国境に一番近いデルグアデロ市までの地域。

(七) アレキップ市内・近郊からコルカ渓谷一帯までの地域。

(八) アヤクーチュヨ市内

さらに筆者のクスコ市到着翌日、ペルー側からさらにアプリマク州文化遺産の追加調査要請があり、ビデオ資料など詳細に検討した結果、日程を割くこととした。提案のあったアプリマク州は自然条件が厳しくペルー国内でも最貧州に位置づけられる地域でペルー人ですらその場所を特定できないような辺境である。当然観光客向けのレストランやホテルなど皆無であり、寝袋と食料、飲料水を用意する必要もあった。プレーインカ、インカ時代の遺物も含め歴史的文化遺産の本格的調査などまだ実施されていない。道路地図以外の資料、データなど皆無といった状態だったが、かつて植民地時代のミタ労働力の供給源のひとつであったことは疑いなく、「銀の道」の一支線として調査の必要を感じた。これにこれまで日本はもちろん他国の調査団も入域したことがない未調査

地域であるということも大きな魅力だった。ただ全体日数が限定されている関係上、他所の調査時間を削らざるを得ず、苦慮の末、上記(七)、(八)をチーム調査の対象からはずし、岡田、加藤各々が独自に調査することとした。再度整理しなおすと、チーム調査地域は(三)、(四)、(五)、(六)、(九)アプリマク州南東部で(一)、(二)、(七)、(八)の四地域は個人ベースで調査を実施した後でデータ交換することとした。

最後に当プロジェクトの共同研究者の性格を明らかにしておこう。岡田、加藤、ペルー側共同研究者の間では調査地域、調査対象を同一としながらもその目的は微妙に異なった。岡田は宗教建造物内外に描かれた装飾絵画(主に壁画)の様式的、技法的特徴の研究ということになろうか。いわゆるタブロー画は対象外としたのだが、これにはペルーならではの特殊な事情が背景にある。ペルーでの美術研究を一番困難にしているのが盗難問題である。背景には「貧困」という二文字が浮かんでくるのだが、植民地時代の優れた作品を残しながら人手不足から警備が手薄となる地方の教会堂が狙われることが多い。研究者がどこにどんな(価値のある)作品があると公表したがために盗難に会い、その作品が永遠に一般の目にふれることが無くなった事例は多い。一般に重量のかさむ彫刻類よりも軽い絵画の方が狙われる確率が高い。特

にキャンバスに描かれたタブロー画は枠からはずせば小さく丸めて運べるためプロには格好の盗品対象となる。従って共同体内の信者以外に情報が外部にもれることを徹底的に忌み嫌う。しかし盗難は外部の人間によるものばかりではない。金銭的な必要にかられて教会司祭がこっそりと売却してしまう例も多く、その場合現実存在する美術作品と在庫リストの間に整合性がないことが外部にばれてしまうことを恐れてやはり聖職者から研究者の受け入れが拒否される。純粹にアカデミックな目的で埋もれた作品や作家に正当な評価を与える行為が犯罪を誘発し、評価対象となった作品自体が失われる危険が存在することがペルーにおける美術史研究の大きな障害となっている。従ってペルー植民地時代の系統的な絵画研究(特に外国人にとって)はすでに美術館などに所蔵されているもの以外となると、盗難の確率の少ない建造物と一体となった壁画のような装飾絵画に限定されてしまうのだ。そしてペルーの交通事情からアクセスの難しい地方によりオリジナルな装飾画で未調査のものが多く分布する。岡田はこの点に着目しての研究調査である。

加藤はラテンアメリカ美術研究が発展するとなれば、二十一世紀には避けて通ることのできない図像学的調査を試みた。図像学の対象とするものは実に広範囲に存在するが、ささやかながら蓄積のある「人魚」関連表現に

絞り込んでの調査である。しかし表現メディアは単に絵画や装飾壁画に限られず、彫刻、建築装飾、タイル、工芸品など多岐に渡るため、特定の図像に絞りこんだとはいえ調査対象は広い。そして予想外に大量にあることも確認された。この点については次項で報告してゆく。

こういったアカデミックな調査をペルー側が受け入れた背景には自国の文化遺産のカタログ作りさえままならないという予算と研究者の不足がまず挙げられる。長期的にはその成果を生かして修復や再建の戦略を練り、公害や自然破壊を誘発する地域開発でないオルターナティブな地域社会発展の原資とすることにある。観光の目玉ともなれば、ホテル、レストラン、流通、輸送など新たな雇用と現金収入を生み出す可能性がある。とは言え、現時点ではまず基礎データの収集と適切なメディアを通じての情報開示という出発点に辿りついたにすぎない。ペルー側との合意では三年に及ぶ調査の成果をインターネット上のサイト、あるいはドメインに蓄積し、世界中の研究者がアクセスできる電子資料館の作成を想定している。斎藤が中心となって大阪の民族学博物館をアクセス拠点とするフォロー体制づくりに従事する予定である。その他、写真集を含めた出版活動、ビデオ出版なども構想に入っている。この目的に沿うため、従来こういった美術のフィールド調査が主として文献資料研究に

終始しがちなもの（それとて重要なことではあるが）だが、あえて写真、デジタルビデオ撮影に大半の時間を費やした。実際の所、時間、予算、人材の制約から視覚資料の収集で手一杯だったというのが本音である。

フィールド調査資料より

フィールド調査資料は現時点では時系列に並んでいるだけである。筆者の手元にある総計五千枚以上のスライド、これに写真家北野と岡田調査員の写真もあわせるとざっと一万五千カット以上の写真資料、それに三時間分以上のビデオ撮影資料、加藤だけで百点に及ぶ文献・コピー資料の総体を整理統合するには至っていない。ここでは加藤の手元にあるフィールド・メモに基づき、筆者の興味の対象である「人魚」表現を中心に簡単な報告と問題点の指摘を行うに留める。

a. クスコ市内

クスコ市の訪問は三度目で、主だった植民地時代建造物や地理についてはなじみがあった。しかし人魚探しという明快な目的のために歩くと意外な発見の連続であった。

(1) カーサ・デ・ピコアガ

サンタ・テレサ通りに面したポスト・アンド・リントル形式のポルタル(出入り口)両脇に一組の人魚の浅浮き彫りがある。この邸宅が建設されたのは一八〇〇年から十四年の間でこの石彫人魚像もその創建時にはめ込まれた。制作者は不明である。一九七七年から屋敷部分はホテルとして改築されているが、ポルタル部分はホテル玄関口としてオリジナルなまま残されている。サンタ・テレサ通りをはさんでこのホテル・ピコアガのはす向かいには通称「ジャガーの家」と呼ばれる三階建ての個人宅があり、出入り口を挟んだ一階上部の壁に合計六匹の石彫ジャガー浮き彫りがある。一階部分の石壁は石ブロックのサイズ、切り方、石質などから明らかにインカ時代の石造建造物で使われていた石ブロックを転用したのと思われるが、ジャガー浮き彫りのあるレベルでは漆喰壁に変わっており、植民地時代に追加された可能性もある。石素材は年代測定が不可能なこともありこれ以上の断定はできないが、この「ジャガーの家」の浮き彫りに着想を得て、ピコアガ邸には人魚が家を守る守護天使役として彫られた可能性は高い。

(2) サンタ・クララ教会堂

マンタス・マルケス通りに面した典型的な十八世紀のパロッキア建築である。外観は地味だが内部の装飾は庄

卷である。但しミサの時間以外は絶対に開扉せず当然ながら観光客には冷たい。筆者は朝六時半のミサの時間に潜り込んだ。身廊部で一番内陣に近い右側の横置きレタプロ上部に一組の人魚が天使のように聖女クララの納められたニッチの両側を支えている。暗いのと高い場所に位置していることから肉眼ではかなり細部の判別は難しい。

(3) ラ・メルセー修道院

マンタス・マルケス通りに面し、サンタ・クララ教会堂とは同じ並びで約五十メートル程アルマス広場寄りにある。建築学的には塔以外さして特徴あるものではないが元修道院部分が現在は美術館として公開されている。一階回廊部西側に位置するカストディアの部屋に植民地時代は衣装や貴重品の格納家具として使われた木製チェスト(十七世紀もの)の横面に一對の人魚像浮き彫りが観察された。

(4) クスコ大聖堂

三身廊空間を持つ十七世紀完成の大規模建築だが、内部は改修中で警備スタッフの数も多くあまりジックリと細部を見て回れる雰囲気ではなかった。それでも主祭壇に向かって左側身廊部の左側に設けられた正面ファチャダ方向から数えて二番目の小礼拝所に描かれたグルーテスコ模様の横長フリーズの中に天使とも人魚とも解説で

きる図像が描かれている。ただ明らかに修復の手が加えられており、それがオリジナル通りのものの復元かまでは確認できなかった。

(5) サン・ブラス教会堂

南米一の傑作といわれる木製ブルピト(説教用演壇)があることで有名だが、教会堂自体は小規模なものである。身廊部右側にあるバロック様式で製作された横置きレタブロの頂部左右に二体つつ計四体の人魚像がレタブロの一部として彫られている。ふっくらした頬、豊かな胸のふくらみ、そして広い腰とかなりハ女性V性を意識した表象となっている。

(6) サン・アントニオ・アバッド修道院礼拝堂

ブラサ・デ・アルマス広場から一ブロックほどナサレナス通りを西に登った所にある。かつて修道院として使われていた空間はその後コレツヒオとなり、現在も教育施設として使われている。その元修道院の出入り口として使われていたポルタル部分はコレツヒオになる十八世紀に大幅な改修があり三層のバロック様式ファチャダになっている。その扉に一番近い一層目の扉上部中央に紋章があり、その紋章を挟んで人魚風の横長モチーフが左右から支えている。

(7) 宗教美術館

ブラサ・デ・アルマス広場より北側に一ブロックほど

離れた元は大司教邸として代々使われて所だが現在は美術館として公開されている。クスコ派の絵画コレクションには見るべきものがある所だが、個人礼拝堂内壁に二人の人魚もどき木彫像がぼつんと置かれている。もともとはどこにあったものか、何かの付属物だったのか、それとも自立した丸彫り装飾なのか解説など一切ない。顔の部分以外は全て金で覆われており、ラテンアメリカ全域で十八世紀の流行となった「エストファド」技法の作業を中途で止めてしまったようにも見える。胴体部側面を見ると小さな羽根があり、腰の部分に鋭くて長い爪状の突起物(足?)が見える。ギリシャ神話のセイレーン・タイプの人魚ということだろうか。

(8) ラ・コンパーニャ教会堂

ブラサ・デ・アルマス広場に面した元イエズス修道会の修道院教会堂で、現在はパロッキアとして使われている。典型的なイエズス修道会のバロック建築で天井がひとときわ高く規模も大きい。信者出入り口扉から入り、南側(右手方)壁沿いの三番目のレタブロ上部の左右に一對の木彫人魚像があったがその位置は高く、また暗くて肉眼ではほとんど識別できなかった。

(9) クントル・ワシ通り三九五番地民芸店

古い地図にはトリウンフォ通りと表記されているものもあるが、正確にいつから改名されたかはわからない。

礎石部分にはインカ時代の切石を利用した石造建築で、現在は通りに面してワnlルームづつ民芸品店となっている。三九五番地の表示のある民芸店の出入り口上部になり厚みのある石彫浮き彫りの動物が左右に一對あった。人魚とすぐに結びつけられるものではないが、技法的にはクスコ市伝統の土着表現のプロトタイプであるように思われる。

b. バリエ・デ・サグラドス

クスコ市（標高三三九五メートル）の北部から西部一帯に広がる渓谷地域でピサック（標高二九六〇メートル）、カルカ（同二九二八メートル）、ウルバンバ（同二八六三メートル）、オリヤンタイタンボ（同二八〇〇メートル）といった主要町村とクスコ市をつなぐとほぼ五角形を形成する。クスコ市から一番遠いオリヤンタイタンボまで道路距離で六八キロメートル離れている。峡谷一帯はクスコ市より標高が低く（したがって酸素も濃く気温もやや温暖）、河川の水量も豊富でインカ時代のクスコ市の食料を支えた農業後背地であり、インカの神々への信仰の中心地でもあったことからこの「聖なる谷」の名で呼ばれるようになった。現在ではその範囲をオリヤンタイタンボからさらに西に四〇キロメートル程離れたマチユピチュまで拡大してバリエ・デ・サグラドスと呼

んでいるが、観光の統合パッケージとして売り出す州政府のイメーヅ戦略の故であり、元来はもっと狭い範囲の渓谷部分である。十六世紀後半のキリスト教布教初期から住民改宗のターゲットであり、その意味ではカトリック信仰布教者にとっても「聖なる谷」であった。

（1）コロオ村ベレンの聖母教会堂

典型的な十六世紀の一身廊一塔式教会堂プランで正面ファチャダは西側、祭壇は東側に位置する。壁はアドベ積み上げ、天井は麦藁を泥モルタルで接着剤のようにつなぎ合わせ、屋根は両切妻木梁構造のシンプルなものであり、内部は白い漆喰仕上げのみで壁画などの装飾はない。主祭壇後方衝立左側に聖セバステイアンの像が置かれていたが、全身テラコッタ作りで顔立ちや衣装は現代に伝えられるインカの伝統風俗に基づくものである。

（2）タライの教区教会堂（パロッキア）

ピサックの南端市境となるビルカノータ川にかかる鉄橋の手前で北西（左）に向かう未舗装道路に入り、約二キロメートルほど進むとタライの村中央広場につく。この中央広場に面した南側に十六世紀建造の一身廊型アドベ造り教会堂がある。内部はかなり荒れており、修復作業を始めたにもかかわらずかなりの期間中断しているようだ。コモド（管理人）のを見せてくれたワシントンD・

C.の文化財流通専門家フレデリック J. トラスロー氏作成の美術品盗難レポートのコピーを読むと三二点の所蔵絵画のうちすでに八点が盗まれ、アメリカ合州国内に持ち込まれたようである。このためこれ以上の盗難を防ぐためか我々調査員の身元確認や調査目的の審査はかなり厳しかった。教会堂南側、すなわち内陣奥外側壁にはさらに南側に隣接した平らな耕地に向かって中二階の高さのカピリヤが設けられており、壁画が残っていた。ここは屋外教会堂として使われたものである。かつてこの耕地に集合しミサを受けた先住民信者たちは教会堂の屋根の後ろにそびえる聖なる山リンレ (Linné) 山を見上げる形となり、その山神の声が聖職者を通じ増幅されて聞こえてくるような錯覚を持ったことだろう。

(3) ピサツクの教区教会堂 (パロッキア)

ピサツクは毎週火・木・日曜日に民芸品や農産物の朝市を開催するので観光客には有名な場所である。またインカ時代の城塞遺跡もあり考古学的にも重要な場所であるが、中央広場に面していた十六世紀建造の教会堂は廃棄されたままで朽ちていた。かわりにコンクリート造りの新しい教会堂が隣接して建てられ住民への宗教サービスのために使われている。しかし建築・美術的に見るべきものではない。ただ過去十年位の間に描かれた外陣部壁画フリーズに人魚モチーフが登場している。アクリル

系塗料を使っているため極めてキッチュな印象だが、ピサツク住民の共有する民衆イメージのひとつに人魚があるということだろうか。それとも単なる偶然の産物だろうか、確認はできなかった。

ピサツクには中央広場から西に約一キロ位離れたカサブルコ地区にパタカリエ (ケチュア語で“高い所”という意味) の礼拝堂と呼ばれる簡素な「悲しみの聖母」に捧げたカピリヤがある。二〇世紀のある時期に廃棄 (記録なし) されてから土地の人間さえほとんど訪れることがないというのがポルテロ (鍵番人) の説明だったが、そのおかげか天使の描かれた壁画の痛みは少なかった。またオルター (祭壇) 側面にユダヤ教のラビと七本枝の燭台浮き彫りがあつたのは極めて異例なことで、謎の礼拝堂ということになる。

(4) ラマイの教区教会堂

平面プランの原形は十六世紀起源だが、その後の改修と増築で規模は拡大し、内装は二〇世紀になって大々的に十九世紀流行の新古典主義様式に改装されていた。北端になる祭壇後方の壁外側の壁構造の意匠は独特なもので、隣町になるカルカの教会堂と共通する意匠だがバリエ・デ・サグラドス地域にはこの二例しかない。壁画フリーズに人魚あり。

(5) カルカの教区教会堂

中央広場の北側に面して建てられているが正面ファチャダは十九世紀後半の再建である。ただ二階部に木の手摺りをつけたバルコニーがあるのは、十六世紀当時のオリジナル建築にあった屋外教会堂の基本デザインだけ残したもので、実用機能はない。祭壇背後は屋根のある市民の日常生活用市場と隣接してほとんど見るとこは出来ないが、ラマイの教会堂の建築意匠と共通である。壁画および建築装飾浮き彫りに人魚あり。

(6) チンチェロの教区教会堂

インカ時代はかなり大規模な行政都市として知られていた。元はインカ神殿のあった場所にその礎石を利用して教会堂が建てられた。従って方位も通常のプランとは異なり、鐘塔が南方向、祭壇を置く内陣は北方向に置かれ、信者は広場に面した西側に設けられたポルタルから出入りする。十六世紀一身廊様式の内部は天井、ポベダも含め装飾壁画で満たされており、人魚像も描かれていた。またオルター後方の主レタプロにも人魚像があった。人魚と水の存在の關係には留意すべきだが、チンチェロの南方近くにピウライ(Piray)湖があり、人魚にまつわる伝承や伝説の存在を確認する必要があるだろう。

(7) ワロコンドの教区教会堂

ここも十六世紀一身廊様式の教会堂で、方位は北側に

内陣を置き、北東角に鐘塔があるという変則的な配置である。照明のほとんどない薄暗い内部空間はやはり装飾壁画で満たされていた。特記すべきはブルピト(説教用演壇)下部彫刻で、ホルスタイン並みの豊かな巨乳とややピンク色づいた白い肌の八体の人魚像が、濃茶色のニス仕上げブルピトを支えている。下半身は鳥でも魚でもなく動物風のデザインになっているが足の存在を示すものはない。また頭頂部には丸い輪がはめられており、これは天使をイメージしたものであろうか。

(8) スリテの教区教会堂

建物の様式、配置、建設時期すべてがワロコンドのものと極めて類似している十六世紀のものである。しかし組紐文様の複雑さや痛み方から見て、このスリテの教会堂の完成の方が早かったと想定できる。装飾壁画に彩色された人魚が描かれているがワンパターンでおそらく修道士の持ち込んだ西洋出版物の挿絵などから同一のフリーズ文様見本を参照したためと想定できるが証拠はまだない。

c. クスコウウルコス間の地域

フジモリ政権時代の道路整備事業の目玉として完全舗装化の進められているクスコウデルグアデロ間を結ぶ国道三S号線のうち、最後の工事区間約五十キロの周辺地

域で、標高差の上下移動を含め、直線距離が短い割には移動時間を余分に費やした地域でもある。ただ「銀の道」のメイン・コースのため、インカ時代からかなりの遠隔地であつても住民の移動も含め商品の流通は煩雑である。平地はほとんどなく農耕地拡大に限界があるためとも推察される。また現代では観光でも秘境ツアーの対象のよう、一車線幅の山道しかアクセス方法のない我々の調査地にもヨーロッパ系の観光客を乗せた大型観光バスが乗り込んでくる光景に何回も出くわした。スペイン語よりもペルーの第二公用語であるケチュア語の方が飛び交う地域でもある。

(1) アンダワイリヤス

この調査地域の中では最大の町でやや観光地化している反面、教会堂の修復保存や資料の整備など行き届いていた。中央広場の一段と高くなった北側に南北方向に一身廊教会堂が置かれている。信者たちの出入りする正面ファチャダは従つて北側を向いているわけだが、その正面にクコリオルツコ山(ケチュア語で“黄金の山”の意味でインカ時代から金鉱があつた)が対峙している。正面ファチャダの二階部分はバルコニーのある屋外教会堂となつており、かつてミサを実施した聖職者の声は中央広場に集まつた住民たちの頭上を越えて遠くクコリオルツコ山の神にも届いたことだろう。美術史的には正面ファ

チャダの裏側、すなわち出入口左右の内部側壁、中二階に設けられたコロ(聖歌隊席)の床裏部分の壁画が有名である。東側の壁には世俗の華やかな生活、西側には最後の審判で地獄送りとなる地上で豪華な生活を送つた人々の姿が対比的に描かれている。アンダワイリヤスは財政的にもやや豊かであつたため、外部から聖書主題と西欧絵画技法に通じた画師を呼び寄せて壁画制作を依頼したものと思われる。表現スタイルは十七世紀のものだが、実際の制作年代の特定などは今後の課題である。平面プランで異色なのは、内陣の奥行きが深く、外陣部の奥行きとほぼ同じ長さに達する。このため内陣部裝飾物の量も多い。内陣部左右上部に設けられた計六枚の方形ガラス窓枠は絵画のタブローのように厚い木枠で支えられており、計十体の木製人魚像が置かれている。さらに内陣部左右壁下部のフリーズにもグルーテスコ文様の主モチーフとして人魚像が描かれていた。祭壇後ろの主レタブロを支える円柱、また内陣部左右に置かれた横置きレタブロ支柱には牛、ライオン、羊、コンドルなどの動物の表象があり、凶像の動物園といった様相だ。東側内陣壁に設置されたレタブロに一对の丸彫り人魚がいる。それぞれが両手を前にだし、今にも動きだしそうなポーズをとっている。この内右側にいる人魚の右手は肘から先が欠損している。上半身は黒の水着を着ているようで鱗状の突

起模様がつけられ魚のイメージを強調している。この地域での人魚表現像の中で最も印象深いものだった。

(2) カニンクンカの教会堂

畳五十畳分位の広さしかない小さな教会堂だが、国道3号線をはさんだ北側の丘はかつてインカ時代の砦が築かれていたことは明らかで、布教戦略上では重要な場所であったことが推察される。装飾壁画の文様パターンなどは基本的にアンダワイリヤスのものと共通である。守護聖母である「希望の聖母」像は南側内陣最奥部の壁にニッチを掘り、その窪みに直接描いたもので壁画の一種であり、前面にガラスがはめ込まれていた、レタプロはこの聖母像の描かれたニッチ部分をあけて後から壁のサイズに合わせてはめこんだものである。西側壁に置かれた二体の横置きレタプロも基本的には同じ構造で壁に開けられたニッチを取り囲む形で取りつけられている。そのうち主レタプロ側に近い方の横置きレタプロの左右に一对の人魚像に限りなく近い図像があったが、肩より下の表象があいまいなため断定はできない。なおここで日本のカップの伝説に近い水中に棲むアベという妖怪の伝承を採集し、さらに正面ファチャダ礎石部分にカップらしき線彫り陰刻を発見したがアベの図像表現の研究事例はなく、今後の調査課題となった。

(3) ウアロ

平面プランは一身廊様式で南北方向に置かれている。内陣部の奥行きは長く、アンダワイリヤスと同タイプである。正面ファチャダの内側、すなわちコロ下部の聖書主題壁画は有名だが実際に見た人は少ないはず。東側(左側)壁にはファチャダ側に死神の活躍、内陣側に天国と地獄絵図が、西側(右側)壁にはファチャダ側に最後の審判のうちの地獄に堕ちた人々の裸体シルエット図、内陣側に救済の場面が描かれている。外陣側壁に置かれた横置きレタプロの構造はカニンクンカの例と同様、壁にニッチを掘り、その位置に合わせてレタプロを組み立てるタイプのものであった。壁と切妻屋根の境には十八世紀制作のコーニスが連続してあり、西側壁に沿って正面ファチャダから二つ目のニッチ・レタプロの真上でコーニスのさらに上部に二体の人魚像が描かれていた。計四つあるニッチ・レタプロのうち一番新しいものには一九〇七年六月の日付が刻印されていた。人魚像の製作年と直接結び付けられるものではないが人魚像がコーニスの制作年代よりは後であることからオリジナルものの修復という可能性も含めて、現存像は十九世紀末から二〇世紀初頭とかなり製作年を限定することはできる。屋根は十六世紀当時のオリジナルなものが残っているが、現在ではその上に一回り大きい屋根を乗せて、オリジナル屋

根を保存している。

この他祭壇側面全体は銀のプレートで覆われており、そのうち信者側に向いた正面部にはドラゴンと人魚が絡み合ったデザインの細工があった。

(4) オロペサ

十六世紀の典型的な一身廊様式の教会堂である。内部装飾のコンセプトは明快で、内・外陣部全体はちょうど目線の高さで壁上方に設けられた窓の高さの位置で水平方向に連続する二本のフリーズ装飾壁画で統一されている。天使図像と人魚図像の区別も明瞭で、内陣部東南方向の横壁中央で別空間としてつけたされた小礼拝堂の祭壇レタプロ上部壁画装飾の一部に組み込まれたメダリヨンの中の図案が人魚と認定できる他はすべて二本の足がきちんと表現された天使像であった。オロペサの美術遺産のうち傑作とされているのが木製「サン・プラスに捧げるプルピト」である。クスコのサン・プラス教会堂にあるプルピトがペルー製プルピトの最高傑作であると考えられているがこれが寄木技法に抛るあるのに対し、サイズ的には下回るものの一本の木幹から作られたものであること、具体的な図像の数が多く、という二点からオロペサのプルピトの方が優れていると地元の人々は述べている。円筒形をしたプルピトの側面には二体一組となった木彫人魚像が四セット彫られている。この他に横壁に接する

円筒奥には左右に一体づつの人魚像もある。さらにこのプルピトの重量を下で支える肘木も人魚像を表現している。但しこちらは全員髪の毛と髭を伸ばした男性の顔になっておりマーメイドならぬマーマン（男人魚）ということになるが西欧にもマーマン表現の事例は多いし起源は同一である。西欧のマーマン表現と大きく違うのは頭の上に土着的な動物、すなわち蛇や蛙の表象を伴っていることで、同一の動物でも全て異なったサイズで、異なったポーズを取っている。

オロペサに関する文献の中に植民地時代建設の市民住宅の門の石彫彫刻に人魚図像があるとの記述があったが、地番は明示されてなかった。このため現在では唯一植民地時代のままに残されているエストレリヤ通りの建造物も逐一調査した。図像が残っていたのは二か所のみで、ひとつは一对の天使像（エストレリヤ通り二三番地）、もうひとつはジャガー像（同三〇九番地）でいずれも人魚ではなかった。おそらくすでに消滅したのだろう。オロペサでは逆に文献には登場しないにもかかわらず存在する礼拝堂に出会った。「星の聖母の礼拝堂」で、エストレリヤ通りの一番端にあった。トトラ（葦）材を敷きしめた後、漆喰で目止めしてゆくだけの重量の軽い屋根と薄い壁の小さな一身廊様式礼拝堂で、守護聖母は祭壇後方の壁に開けたニッチの中に描かれている。そしてそ

のニッチを囲むようにレタブロを組み立てていた。建築様式や規模だけ見れば十六世紀のものだが、記録にでてこない点を考慮すると十九世紀以降のものであろう。

(5) コルケパタ

分類するとこの地域に入るのだが、道路事情からピサツク市を回ってゆくルートを採択する。クスコより三時間の行程のうち二時間は山岳悪路で揺られることとなった。中央広場北側に面して建っている一身廊教会堂である。まず中央広場に建てられている石造十字架正面が広場の中央方向でなく、教会堂ファチャダに向けてられているのが珍しい。台座部分に一六五五年の日付が彫られていた。内部は装飾壁画で覆われ、特に両切妻構造のポベダでは一列に三体の顔が連続して描かれているが、下から見上げる信者から一番遠くなる中央棟線に近い所ほど遠近感を補正して大きく描いているため、三体の画像が同じ大きさに見える。外陣部西側壁で一番内陣に近いニッチ・レタブロの基部で六体の木彫人魚像が支えている。また内陣と外陣の境界部上部を覆うアルコを左右で支える四角い支柱の各々に顔を斜めにかしげたかなり写実的な人魚像が描かれているが、人魚彫像とは全く時代と様式の表現となっている。

(6) オコンガテの教区教会堂

クスコを朝五時半に出発し、着いたのが午前十一時で

あった。中央広場の北側一画を全てふさぐように置かれた東西に横長な一身廊教会堂で、信者たちの出入り口は広場に面した身廊部中央の北門である。主祭壇後方レタブロはサロモニコ円柱を使った正統的十八世紀バロック様式だが、横置きレタブロには月や星、太陽など土着的なモチーフが多くあしらわれていた。天井一面にも装飾画が描かれているが天使像と人魚像の表現がきちんと区別されている。また内陣部と外陣部の境界上部アルコには首の部位で繋がれた二体一組の天使の顔のセットがフリーズ状に描かれていた。

d. ウルコス以南、フリアカ市までの間の地域

クスコ市からチチカカ湖に通ずる幹線道路で舗装工事の完了した国道3S号線のドライブは快適そのものである。この道路の標高最高点であるラ・ラヤ峠(La Raya: 四三三五メートル)を越えると、標高自体は高いが平坦そのもので広大な農牧地帯となる。ただ人口密度は低く、植民地時代もミタ労働者移動の幹線道路であったにもかかわらず、ポトシ銀山の富の一部でもこの地域のどこかに集中的に還元される要素はなかった。発展を遂げるのは十九世紀のペルー独立達成以後のことで、大規模な農牧畜地の他に巨大なセメント工場などが稼働している。

(1) アヤビリ

人口的にはこの地域最大の町で、経済的にもかなり裕福だというのが第一印象だ。中央広場も大きく、その北側に位置するアシジのサン・フランシスコ教会堂もラテン十字形の平面プランを持つ翼廊部分を備えた大規模なものだが、十九世紀に全体が徹底的に改築されて現在のものになっている。従って古い植民地時代の面影を残すものはなく、建築装飾物は全て典型的な新古典主義の端正な表象となっており、天使像しかない。唯一東側翼廊部の北側にあるレタプロ上部に人魚もどきの石浮彫彫刻図像が一对あったが、人魚表現を試みたというよりは天使図像のバリエーションのひとつと解釈した方が妥当であらう。

(2) ランプ

豊かさではアヤビリに匹敵する町で、教区教会堂という格だが、この地域では最も費用をかけた豪華な教会建築となっている。中心には二つの広場があり、教会堂西側の広場に面したファチャダが正式な出入口だが、現在では北側の広場に面した身廊部中央の北門のみが日常的に使われているようだ。アトリオの敷石には一六七五年、一六八五年の建造日付が入っている。しかし主祭壇後方レタプロを含め内装は全て十九世紀の新古典主義様式で統一されている。しかし西側ファチャダの内側でコロを

支えている石の丸柱は十七世紀オリジナルのものであった。西側ファチャダの扉上部に一对の人魚彫刻が置かれている他は、内部彫刻、装飾壁画全て足のある天使像のみである。カタコンベに繋がる聖器安置室にはラファエルの聖母像のコピーが、またカタコンベ上部にはミケランジェロのピエタ像のコピーが置かれているところもかなりユニークである。余談だがこの町には世界最大と自認するフエゴ・デ・オカ(Fuego de Oca)の競技場がある。

(3) アサンガロの教区教会堂

アサンガロ市はペルー独立のきっかけとなった「トウパック・アマルの反乱」に参加した地元先住民の英雄ペドロ・ビルカ・アパサを生んだ場所でもある。町の中には旧広場と新広場があり、「アスンシオンの聖母に捧げるパロッキオ教会堂」は旧広場の東側に建てられている。建物は二〇世紀に大修復工事があり、広場に面したファチャダは一九五一年に改修が終わっている。外陣部左右の壁にそれぞれ六枚の巨大宗教画が掛けられているがこれらは撮影禁止だった。身元確認の事務手続も一番厳しくパスポートのコピーまで要求されたが、過去にかなり盗難にあつてきた経緯を聞かされると当然という気もしてくるから不思議である。平面プランは一身廊タイプだが、翼廊風に礼拝堂を置いているため上から見る

とラテン十字形に見える規模の大きいものだ。塔はなく、屋根もオリジナルのものは崩壊し、現在は仮設のトタン屋根で覆われていた。しかし正面ファチャダはかなりエレベーション位置の高いマニエリスム意匠に十八世紀バロック建築に多用されたサロモニコ円柱が組み合わされ、改修以前のオリジナルなファチャダは十七世紀に完成した後も何度か改修があったように思われる。主祭壇後方レタプロを含め内部に置かれたレタプロ類には全てサロモニコ円柱が使われている。北側（左側）礼拝堂への入口上部は丸アーチ状になっており壁の厚さ分の幅がある。このアーチ部分に楽器を持って音楽をかなでる二匹の巨大人魚が彩色豊かに描かれていた。

(4) アシリヨ

アサンガロから車で約二時間の距離の所にあるが、アサンガロと同一の教区になっており、司祭は両方の教会堂を行き来している。中央広場の東側にあり、祭壇部分が西向きになるというやや変則的な方位位置だが、町全体を見下ろす高台というロケーションのメリットを優先させたためであろう。ここも翼廊風に礼拝堂が左右に付けられているが交差部に円蓋はない一身廊プランを基本としている。正面ファチャダはやはり二〇世紀になってからの改修の跡があるが、アサンガロのものに比べるとかなり土着色の強いモチーフで飾られており、ポルタル

を間にはさんで一對の石彫浮き彫り人魚像がある。文献には内部装飾について記述されたものがなく、あまり期待してなかったのだが、実際には主レタプロや外陣部左右の壁上方に置かれた絵画などかなり質の高いものであった。外陣部には計三体のニッチ・レタプロが置かれていたが、そのうち内陣に一番近い側にある左右のレタプロ夫々に対になった人魚像が確認できたのは収穫であった。

(5) プカラ

プカラはこの地域を中心に紀元前二世紀から紀元後二世紀頃まで栄えたプカラ文化の名称として有名なもので、現在のプカラ市はこのプカラ文化時代からインカ時代までの先住民文化の一拠点だった場所にスペイン人が入植し建設したものである。人魚を含め図像表現の起源や系譜を考える上で重要な場所であったが、肝心の教会堂は改修工事中であることと、責任者がたまたま不在ということもあって撮影許可が下りなかった。盗難対策ということでは徹底した教育がなされているようだ。しかし先住民文化遺物については美術館が開設されており、ここの調査は可能であった。興味を引いたのは石に浮彫彫刻された一群の魚表現である。特に頭と尾を残して身の一部が骨で表現された図像はめずらしく、どれも縦方向に彫られ、頭を上になっている。背骨はまっすぐでなくゆるやかなS字にカーブしている。本稿では詳しく述べる

にはまだ至らないが、伝承説話や神話分析、言語から、この種の魚表現に人魚図像表現の起源を想定する論文もでており、今後の課題だろう。

(6) サンチャゴ・デ・プブホ

正式名「使徒サンチャゴ(ヤコブ)にささげるパロツキア」教会堂があり、十六世紀の都市建設と同時期に建設が始められ完成したが、現在ある姿は二〇世紀初頭の改修後のものである。平面プランや外・内部装飾は一七六七年の再建当時の姿を伝えている。塔は二つあり、また主祭壇後方レタプロの後ろにさらにカマリンと呼ばれる聖体安置室を設けた規模の大きい教会堂である。床の一部には彩色タイルが敷かれているなど豊かな財政事情を反映しているが、身廊部左右の壁は空虚である。教区司祭の話ではかつて十八世紀の巨大パロック絵画があったが、全て盗まれてしまったとのことだった。

中央広場に面して北側を向いている正面ファチャダは十八世紀のパロック様式に準じており、左右の塔に近い石柱の内側に一对の人魚像があった。

(7) フリアカ市

フリアカ市はプーノ県の商業と流通・交通の拠点で空港もある。青空市場に集まる人の数も多く、それに比例して犯罪発生率も高いとされているが、豊かな経済基盤を背景に教育への投資に力を入れている行政者の標語も

また目についた。発展したのはペルー独立以降のことで、

それ以前の植民地時代の代表的建造物は、市庁舎を除けばサンタ・バルバラ教会堂とサンタ・カタリーナ教会堂の二つで、このうちサンタ・カタリーナ教会堂は内装は完全に新古典主義様式に改築されてしまった。しかしファチャダだけは十七世紀の初期パロック様式のデザインを残しており、文献にもよく取り上げられてきた。サンタ・バルバラ教会堂の方も原形は十七世紀のもので、翼廊部を持つ大規模建築である。しかし十九、二〇世紀の改修で原形のパロック様式の装飾要素が十九世紀以降の新古典主義の装飾に変えられた部分も多く、折衷的であるため注目度は低かった。西に面した正面ファチャダには天使図像が多いのに気がつくが、南側の横門を観察すると、まず扉部分がクローバ型のアーチで覆われていること、屋根の雨水を排出するカノンと呼ばれる排水口がジャガーの姿になっていてそのジャガーの口から雨水が排出される、など規範を越えた装飾要素が見受けられた。

(8) プーノ市

フリアカ市から車で約四十分の距離にある州都プーノ市は、標高三八二七メートルの地にあるチチカカ湖に面した行政と観光の中心である。先住民文化の観点から言えば、ここはアイマラ語圏の中心で、インカ帝国の公用語であったケチュア語圏とは文化伝統を異にしており、

文化伝統継承の目的でプーノ市郊外にある州立大学ではアイマラ語の講座も開設されている。漁業と農業、観光を経済基盤としているが、プーノ市内で美術遺産として見るべきものは意外と少なく、大聖堂に一極集中している。大聖堂ファチャダの装飾は圧巻だが、当然ながらクスコ周辺の教会堂の装飾とはかなり雰囲気も違い、何かおおらかでやさしい感性で占められている。正面ファチャダの出入り口上部の左右に一对の大きな人魚像がある他、鳥、ジャガーなどの動物の表象も目立つ。

e. プーノ市以南、ポリビア国境までの地域

チチカカ湖沿いに標高は高いが平坦な「銀の道」が、現在は国道3S号線と名称を変えて、ポリビア国境に一番近いデルグアデロ市まで続く。ポトシ銀山のミタ制度労働力の一大供給地であったと同時にその恩恵に浴する機会も多かった地域で、その成果が美術遺産にも反映されていると期待できる地域でもあった。

(1) デルグアデロ市教区教会堂

当初、調査対象としては予定していなかった場所であった。少なくとも植民地時代には現在ののような国境線はなく単なる通過地点であったため重要な美術遺産があるとは思えなかったのだが、プーノ市観光インフォーメーション課から渡された資料ではかなり観光の目玉にしたいと

いう意図が目立ち、道路事情も良く、それほど苦痛でも時間の無駄でもない判断し調査することとした。内・外装共にここ十年位の間に徹底した改修工事が行われており、装飾要素には見るべきものはなかったが、小さいながらも塔が一基、サイド・チャペルを二つ持ち、また現在の広場とは反対側の西方向に向けて屋外教会堂が設けられていた痕跡もあり、建築史的には興味あるものだった。

(2) セビタの教区教会堂

チチカカ湖岸にあり、植民地時代のミタ労働資料にも常にこの共同体の名称が登場する場所である。この地域の教会堂の平面プランはどこも北側のチチカカ湖を意識しており、祭壇とファチャダの方角は一応東西に向けられるが実際の信者たちの出入りは北方向（すなわち湖に面した）に開けられた身廊部中央の扉を利用するものである。デザイン的にはこの北門が一番大きく、豪華な装飾物で囲まれているのが普通である。セビタの教区教会堂もその事例のひとつである。現在では廃棄されており、門番も近所に常駐してはおらず、隣の村に住んでいた。我々のような研究者も含め訪問者は一切なく、過去五年以上も鍵を使って開けたことはなかったとの門番の証言通り、内部にはハトや他の鳥の糞が四〇センチ以上も堆積していた。鳥以外には聖職者からも研究者からも地元

からもすっかり忘れられた存在になっていたということだ。内部の痛みは激しく、装飾壁画もかすかに痕跡を残すのみで、絵画彫刻類も一切なく、破片のみが埃の下に埋まっていた。電気はなく、光源は懐中電灯のみでの撮影作業となった。北門は上下三層に分かれており、全体をゆるやかなアーチが覆っている。その第一層目の両端に石彫浮彫の人魚像があった。この他内部サクリスタにも金塗装がはがれ半壊した木彫人魚像が四体ほど放置されていたがもともとどこに置かれていたものかどうかまでは特定できなかった。

(3) ポマタ市のサンチアゴ・デ・ポマタ教区教会堂

この地域ではもともと規模が大きく、土着色の強い装飾要素を持つていることで多くの文献に登場する教会堂である。ポマタ市にはこの他にサラゴサ礼拝堂、サン・ミゲル教会堂があるがサン・ミゲル教会堂はすでに廃棄されていた。しかしサン・ミゲル教会堂の小さなポルターダの内側すぐ右側（南方向）に置かれた石造りレタブロに人魚像が彫られていた。サラゴサ礼拝堂はファチャダにかなり素朴な表象の漆喰を盛り上げた一对の天使像がある他は何もなかった。目当てのサンチアゴ教会堂の現状は二〇世紀後半に大幅な修復が施されており観光遺産としても十分耐えられるものになっている。平面プランは一身廊様式だがサイド・チャペルが身廊部左右に各六

か所、計十二もあり、また採光のためのルネットも計十二箇所設けられていた。ポベダはかまぼこ型で主祭壇前の円蓋部までを覆っている。サンチアゴ教会堂の名声を不動なものにしたのが、円蓋部内側に施された彫刻である。細部を一つ一つチェックすると植物流線をベースとした有機的抽象形態が組み合わされたもののだが、全体は若い女性たちが輪になって手と手を取り合いながら踊り歌うイメージを喚起させる楽しいものだ。そしてこの円蓋部分に乗せた円筒部分が横壁とつながる部分でできる三角形のペンデンティブ空間に石彫人魚像が四体組み込まれていた。

(4) フリ市のサン・ペドロ教区教会堂

フリ市内に現存する教会堂の中では最大のもので、一時は司教座を置く大聖堂としても使われた。原平面プランは十六世紀一身廊様式だが一八七三年までに終了した改修の結果、内陣上部に円蓋と内陣左右にサイド・チャペルが加わった。身廊部左右にはニッチ・レタブロが各々六点の計十二点、それに絵画が各々六点の計十二点ある。身廊部北側（左側）で主祭壇方向から数えて二番目の、「栄光の聖母子像」を納めたニッチ・レタブロ上部でレタブロ全体を覆うアーチの上に二体の人魚が鎮座している。また主祭壇後方レタブロの台座部分でレタブロの柱を人魚が支えていた。

フリ市にはこの他にラ・アスンシオン教会堂も訪れたが人魚図像はなかった。ただ興味深かったのは、九点ある宗教画のうち少なくとも四点はメキシコで十六世紀末から十七世紀前半に描かれたメキシコ出身のクリオーリョ画家が残した作品と極めて類似したものであったこと、内陣と外陣の境界アルコとアルコをささえる柱に描かれた極めて西欧のキリスト教図像規範に忠実な壁画があったことで、ペルー副王領の外部から画家が招聘された可能性が考えられることである。

(5) フリ市のサン・ファン・デ・レトラン教会堂

サン・ファン・デ・レトラン教会堂は、同市内にあるサンタ・クルス教会堂と装飾面で共通性を持ち、先に述べたサン・ペドロ教会堂やラ・アスンシオン教会堂とは異質な表象を持つ。どちらもバロック時代の建造物だが円柱の様式はサロモニコ円柱のように柱幹を螺旋状にねじらず、代わりに表面の浮彫彫刻を螺旋状構図に配置して穏やかな動感をだしていることである。浮彫彫刻の意匠には猿、ジャガーといった定番動物よりも、「ユリ」という名称の鳥と「ムニユムニユ」という果物がメインに扱われているのも共通した特徴である。「ユリ」と「ムニユムニユ」の名称はどちらもアイマラ語であり、地元の人にはもっとも親しまれている自然の産物である。「ユリ」は「フリ」市の語源でもある。「ムニユムニユ」

は黄色ばい甲州葡萄のような形の果物で野生でもはえている。この他に「クイ」と呼ばれる、モルモット・サイズのネズミも図像モチーフとして度々登場する。養殖のクイは無菌でこの地域の名物料理の食材として使われている。サン・ファン・デ・レトラン教会堂ではプルピトの頂部に一体の人魚が置かれていた。サンタ・クルス教会堂の方では円蓋下部のペンデンティブ部分の支えとして四点の人魚、及び身廊部南側で主祭壇に一番近い所にあるニツチを取り囲む枠部分にやはり人魚像があったが、装飾壁画の修復にはまだ全然手がつけられておらずこれ以上の調査は不可能だった。

(6) イラベのサンタ・バルバラ教会堂

ペルーのカトリック布教の歴史はドミニコ修道会が詳細な編年史を出版している。二次資料としては極めて便利なものだがまだきちんと読んではいない。ただイラベ関連の記述をパラパラと拾い読みすると、このサンタ・バルバラ教会堂は一五六〇年代初めに建設が始まり、一五六七年にドミニコ修道会士サン・ミゲルが献堂式のために訪問したという記述があった。西欧ドミニコ修道会の意向が強かったのか、デザイン面で土着的、あるいはメステイーン（混合文化）的な要素はほとんどない。一部に赤っぽい石が使われているがこれは地元で産出するウイラコルという火山岩である。現在修復作業が開始さ

れているが市の担当者の話によるともう何年も中断したままだという。主レタプロの枠組みの残り方が不自然なので聞いてみるとレタプロ毎盗まれてしまったとのことだった。正面ファチャダ裏側の裝飾壁画がかるうじて何が描かれているか判定できる程度に残っていた。人魚はみつからなかったが、教会堂北西方向にある広場のモニュメント下部にカップに近い想像動物の図像を見つけた。イラベ市にはもうひとつサン・ミゲル教会堂があるがこちらはサンタ・バルバラ教会堂の後に建てられた姉妹関係にある教会堂で、身廊部壁に掛かっている絵画はサンタ・バルバラ教会堂から持ってきたものである。

(7) アコラのサン・ペドロ教会堂

アコラの町でも中央広場からは遠いが一番高い丘の上であり、敷地からチチカカ湖が眺望できる。すでに廃棄されており、四十年から五十年は鍵をあげたこともないはずだというのが門番の言葉だった。少なくともまだ二十代前半の男性が鍵の責任者となる前任者の父親が存命中も一度も訪問者はなかった、とのことである。しかし入るにはどのみち鍵はいらなかった。建物全体が歪んでしまっているため扉の開閉は不可能となっており、内陣のサイドチャペル南側にかろうじて人一人通れるくらい自然にできた穴を利用した。内部はセピタの例と同じく鳥の糞が分厚く溜まっており、人間の出入りした痕

跡は全くなかった。光源に乏しくかなり暗かったが裝飾壁画に残っている部分の痛みは少なく、塔下部の位置にある洗礼堂の上部壁画フリーズに三体一組の人魚像が八組、計二四体判別できた。また内陣部で主祭壇とサイド・チャペルの間の横壁上部にも左右各三体づつの人魚らしき図像があるが、あまりの高さと暗さのために懐中電灯やビデオ灯光器で照らしても確認できなかった。この町、あるいはこの教会堂が人魚と関連が深かった傍証を調査したく、墓地に埋葬された地元民の墓標をチェックした所、レアンドロ・シレナ・ボルダファリエシオ（一九三九年十月四日死亡）という記述を発見した。同行した門番に何者か聞いた所、シレナ（人魚）一族はアコラのみならずこの地域全体でも一番古い家系を誇る名門であるとの返事であった。基標には人魚図像があった。

f. アレキッパ市内及びコル力溪谷の教会堂群

アレキッパ市は別名「白い町」の名でよばれるように白くきめの細かい地元産出の岩を使った建造物が多い。観光に力を入れており、明るく、安全で気候も暖かいイメージを売り込んでいるが確かに欧米の観光客が増加している。植民地時代の美術遺産を紹介する写真集や出版物、文献資料、ビデオなどの点数も急激に増えており、すくなくともアレキッパ市内および近郊の調査の予備知

識は十分に得られた。なおこの地域の調査は岡田、加藤が個別に異なる日程で実施した。

(1) アレキツパ市内

人魚像のあるのはラ・メルセー教会堂（パロッキア）とサン・アグステイン教会堂のみで、後は一応確認のためにサント・ドミンゴ修道院・教会堂、ラ・コンパーニャ教会堂、アレキツパ大聖堂、サン・フランシスコ修道院・教会堂、カルメン修道院・教会堂、サンタ・カタリーナ修道院も調査したが予測通り人魚図像表現はなかった。ラ・メルセー教会堂は元は修道院も併設されていたが現在この修道院部分はコレツヒオ（学校）として使われている。教会堂主祭壇後方レタプロ中段に一对の木彫人魚像がある。身廊部北側の壁で主祭壇から見て二つ目の横置きレタプロはオリエント起源の想像動物グリフォが下から支え、このレタプロのニッチを様々な動物が取り囲んでいるのが印象的であった。

サン・アグステイン通りに面したサン・アグステイン教会堂の敷地内部に入ることとはできなかったが、外観を見る限り小規模ながらも完成度の高い白く輝く宝石のような存在で、正面ファチャダの扉上部を覆うアルコに一对の石彫浮彫人魚像がある。

(2) コルカ溪谷（カバナコンデ〜ヤンケ間）

アレキツパ市内から長距離バスで北に約三時間の距離

にあるチバイ市を拠点にしたコルカ溪谷一帯のツアーは近年急に観光の名所となっている。一番の目玉は野生のコンドルが棲息している谷のトレッキングだが、大半の観光客はミラドールと呼ばれる観察スポットで待機し、食料捜しに出かけるコンドルを見ることとなる。多い時は十五羽以上のコンドルが空中を舞い、翼長三メートルを越えるような大型コンドルが観察者の数メートル先をかすめることもある。コルカ溪谷一帯はインカ時代から続く段々畑が広範に見られ、温泉湧出地も沢山あり、コルカ川には鱒釣りに最適のスポットが多い。植民地時代から銅などの鉱脈があることでも知られているが、いかにせん平坦地が少なく人口増加と経済発展には限界があった。チバイ市からヤンケを通過してカバナコンデに至るルートはコルカ川の南側を辿るメインルートであるが未舗装で、一九九四年に発生したアバンカイを震源地とする地震で大きな断層亀裂が走り、道路などその被害から完全復旧するには至っていない。冬の乾季には問題ないが、雨の降る夏には道路事情で孤立する村落も多いようだ。

カバナコンデは男性戸主数三千人を越えるこの地域ではチバイ市に続く大きな町であり、中央広場に面した十八世紀起源の教区教会堂も十九世紀の改修で規模は大きくなったが、新古典主義様式の内・外装は美術的には見

るべきものはない。人魚画像もなかった。

ピンチエロの教区教会堂は一七三九年の建立で、正面ファチャダ北側（右手）の鐘塔の鐘の下になる構造体部分に一体の石彫人魚像があった。

マカの教区教会堂は地震で崩壊し、現在修復中であり、中にはいる許可は得られなかった。アトリオ外周部の塀に等間隔に設置された白塗りのテラコッタ製丸壺の上に四角い菱餅を乗つけたような装飾エレメントの存在はユニークなものである。マカの旧市街は九四年の地震でかなりの被害を受け、地下岩盤のしっかりした町の東部に新築の被災者住宅団地が完成したのを機に、多くの住民が転居した。

アチョマの教区教会堂は屋根の高さや控え壁の厚さから見て、まだ西欧建築工法に慣れていなかった十六世紀創建当時の原建築に大きな変更を加えることなく現在に受け継いでいる印象だった。

ヤンケの教会堂はこのルート沿いの教会建築のハイライトであった。かつては修道院も機能していたが現在は複数の個人住居と尼僧のための宿泊施設になっている。二つの塔にはさまれた南西方向を向いた正面ファチャダはアレキッパ様式と呼ばれる織物のように平面的だが複雑な有機的線構成の建築装飾になっている。北西方向にある中央広場に向かって開けられた北門が実用的には信

者たちの出入口だが、ここに一对の石彫浮彫人魚像があった。建造物全体に渡って装飾部分はマカ産の真っ白な火山岩が使われていて清楚な印象だった。

(3) コルカ溪谷（コポラケ〜マドリガル間）

コルカ川北岸沿いのルートで観光客はほとんど訪れることもない。なお北岸と南岸の間の谷は深く、チバイマで戻るか、ヤンケとイチユパンパの間に渡された狭い橋を渡るしか方法はない。またコルカ川北岸でも自動車道路はマドリガルまでしか通じておらず、その西にある農村タバイまでゆくには馬か徒歩しか方法がない。

コポラケで最初に建造された西欧建築は十六世紀のサン・セバステアン・デ・コポラケ礼拝堂であった。内部空間は二十畳位の広さしかないアドベ造りで屋根はキンチャ工法で葺いた小さなものであった。その後十六世紀末にフランシスコ修道会が布教活動を開始し、サン・フランシスコ・デ・コポラケ教会堂を建設し、それに伴いサン・セバステアン礼拝堂は廃棄された。鐘塔に鐘が納められたのは一六二二年のことであった。中央広場の東側に高くそびえるサン・フランシスコ教会堂の正面ファチャダは、バルコニーのある屋外教会堂施設を持つ。アドベで築いた一身廊プランの簡素な構造で白い漆喰で塗られている他、何の装飾もない。書き忘れたがサン・セバステアン礼拝堂は一九九九年にスペインの国際協力

プロジェクトで再建されている。

コボラケからウユウユという名称のインカ城塞を通り過ぎるとイチュパンパの村に入る。中央広場の北西方向に二塔にはさまれた正面ファチャダが面している。北側身廊部外側は補強のための控え壁が四つもついている。身廊内部に建築記録を記したプレートがはめこまれていて、その記述によると一七六六年に創建された後、一八〇九年に改修工事があり、その後一八八四年に再度修復して現在の姿になったということである。実用性のみで装飾らしい装飾はない。

ラビ村の教区教会堂はサイズだけで言うところルカ溪谷一帯の教会堂の中で一番大きい。中央広場の北側に位置しているのだが、まずアトリオが二重に同じデザインの間で囲まれているのが珍しい。しかしまあこれは十九世紀の改修時にアトリオも拡張したが古い方の間は壊さずに放っておいただけのことかもしれない。本当にめずらしいのは正面ファチャダのデザインだ。一般にファチャダは塔基礎の一番前面の線より後方に下げるのが普通である。しかしこのラビの教区教会堂の場合ファチャダの位置は二つある塔の一番前の線に揃えてあり、ファチャダ全体を覆うアーチはファチャダの線よりさらに前に出ているので結果としてアーチ型の軒がついているように見える。身廊部外陣部には横置きレタブロが左右に三

つつ、計六点ある。建物外では祭壇の真後ろに回るとかつてカマリンが設置されていた痕跡があった。

マドリガルは農業中心のコボラケ、イチュパンパ、ラビと違い、銅鉱山と共に発展した町である。現在も採鉱は続いているが昔からそれほど経済的に豊かであったという形跡はない。中央広場の北側にあり、東西方向に長く置かれているが、東向きに正面ファチャダが向いているのが特色である。ファチャダ上部にサンチャゴ・デ・マタモロスの浮彫彫刻があり、ファチャダ北側（左）に一本だけある鐘塔は三層構造になっている。しかしもはや廃棄されて使われなくなったのか、内部に入ると祭壇周辺の内陣部は何者かによって破壊されたまま放置されている。盗難事件でもあったのだろうか。しかし調査と撮影を続けている間も地元住民と交流する機会はなく質問する相手に出会うことはなかった。

(4) コルカ溪谷（チバイ）カリヤリ間

チバイ市はコルカ溪谷に散在するすべての町村のアクセス拠点で観光客向けホテルやレストラン、タクシーもある。メルカド（市場）も常時開いていて、肉類の種類が豊富であった。元々はインカ時代の大規模な墓地があったところで、チバイからコボラケに向かう道路の東側にそびえる山頂周辺はサクサワマンと呼ばれる埋葬地がある。チバイの中央広場東側にて建っているのが「アスン

シオンの聖母」教会堂で、筆者の調査時は外回りの改修工事を行っていた。ただ隔週日曜日のミサ時には市民に解放される。ちなみにコルカ溪谷全域がひとつの教区となっているが教会司祭は一人しかないそう、隔週毎に各地の教区教会堂を巡回してミサを実施するようだ。従って常駐拠点であるチバイでも毎日、毎週ごとにミサを実施できるわけではない。正面ファチャダは二階にバルコニーを設けたコポラケのタイプと類似している一方、このファチャダ部分が左右の塔の前面をつなぐ線よりも前に張り出して、アーチ部分も軒のように広場に向かって突出しているのはラビの教会堂のデザインと共通である。内部装飾は二〇世紀の改修が施され古いものが何一つ残っていないが、デザイン的にはカバナコンデの教会堂のものと同類である。

チバイから未舗装だが二車線幅のある国道をコルカ川に沿って北東方向に向かってゆくと最初にでてくるのがトゥティの町である。小さな広場に不釣り合いなほど大きい石製十字架があり、その十字架と対峙するように北側に教会堂があるが最近使われている形跡がない。二塔あるが東側の塔は半壊したままである。敷地周囲を歩いてみたが民家がびっしりと隣接して建てられているため、建物全体の様子を確認することも不可能であった。

シバヤは大分川幅も広くなり水量も豊かになったコル

カ川の西側川岸に細長く発展した町である。広々として明るくというのが第一印象だが標高は三八七メートルもあり、川から吹く風は冷たい。教会堂の正面ファチャダはコルカ川を望む南東方向に向けられているが装飾は地味である。石彫十字架の設けられた広大な教会アトリオは北東方向にあり、実用的にはこの北東部アトリオに向かつて開けられた横門が使われているのだろう。装飾もこちらは複雑で様々なポーズをとる石彫浮彫天使像が群生している。

コルカ川を跨ぐ鉄橋を使って東岸に渡り、温泉が湧き出するためインカ時代から温泉療養地として使われてきた施設を右手にみながらシバヤから約三キロ程行くと、小さい山の中腹にあるカリヤリの町に着く。アレキッパ市からまっすぐ北上する国道二八号線ルートを進めると最初に出会う交通中継点でもある。町全体が二〇世紀後半にきれいに整備され、教区教会堂も同時に徹底改修されている。教会堂は中央広場の北西方向に位置しており、二本の鐘塔にはさまれた正面ファチャダは北東方向に開かれています。しかし信者たちは広場方向に向かつて身廊部中央に開けられた南門を多用しているようだ。教会堂内部は全くといっていいほど装飾物はない。しかし正面ファチャダの扉周囲と南門にはアンバランスな程の大量の天使像浮彫があり、おそらく改修前のイメージを残す唯一

の場所であろう。

g. アプリマク州南部地域

アプリマク州はペルー人の間でもまずそういう州があるのさえ定かでないような地域である。州都はアバンカイ市だが空路はもちろんないし国道ともまだ繋がっておらず、他の町村規模はさらに小さい。しかしインカ時代の遺跡は多く（しかもそれらのほとんどが未調査）、植民地時代もミタ労働力のまとまった供給源の一つにはなっていた。銀鉱脈もあったが山が深く規模も小さかったので、数十年で掘りつくすと廃棄された場所も多い。廃鉱後は細々と農業・牧畜で生計をたてている数百人規模の村落が多いのが特色である。開発が遅れている最大の理由は厳しい地形にある。山と谷の連続で平坦部分が少ない。ようやくフジモリ政権時（九五年から二〇〇〇年）になって電気、電話、道路といったインフラ事業が進められたが、道路に関して言えばまだ一車線道路を二車線道路に拡張している段階で舗装工事の段階には至っていない。しかし最近ではエコ・ツアーの興隆で、急流ラフティングや溪流釣り、トレッキング、マウンテン・バイクなどワイルド志向のマニアックな外国人旅行者の注目を浴び始めている地域でもある。アバンカイ市以外はまずレストランもホテルも皆無。この状況を楽しめるかが

ポイントになる。この地域の調査は当初予定に入っていなかったが、手つかずの美術遺産が眠っていることと、将来の持続的な観光開発の原資を再発見することで、我々の調査が単にアカデミックなものだけでない形でペルーの未来に貢献できるとあれば本望でもあるので実施を決めた。ルートはコタバンバ→タンボバンバ→アキラ→マラ→リヤクワ→パタワシ→サント・トーマス（クスコ州）→クスコ戻りというもので、時間的制約からアバンカイ市西・南部の調査は断念した。

クスコ市からコタバンバ村までは地図の上では百二〇キロメートル位の距離だが山道で時速三十キロ走行が限界だった。クスコ市を朝の三時半に出発して半分の距離の所にあるコタバンバ村に到着したのが八時半。ここは極めて地方色の強い闘牛が毎年開催されることで少しは知られており、朝食を提供する店もあった。

(1) コタバンバの教区教会堂

十六世紀の創建当時の雰囲気そのまま残している。平面プランは東西方向に向いているが、村の東を流れるアプリマク川にむかって土地が傾斜していて、水平を保つために一番下の礎石の厚みを一個づつ変えて調整している。高低差のある土地に高さのある鐘塔を教会堂に併設して建てることは技術的にむずかしかったのか、二層の鐘塔は道路をはさんだ北東の位置に独立させている。

床は土間のままで内部装飾に見るべきものはなかった。

(2) マラの教区教会堂

すでに廃棄されてかなりの期間が経っており、半壊した壁が残っている他はボベダもすべて落ちていた。ただ原形は円蓋に翼廊もつらテン十字形をした規模の大きいものであったことが推測された。かつては銀鉞のあった場所ですれなりに富も地元で還元されていたことが伺える。かすかに痕跡として残っている壁画部分からもかなり水準の高い装飾で飾られていたことが感じられた。

(3) アキラの教区教会堂

共同規模はタンポバンバより小さい人口三千人位の村だが豊かさでは勝る。インカ時代の砦跡や二〇世紀の刑務所跡などもあり、行人向けの簡易宿泊施設、地元人向け食堂もあった。しかし公衆電話は村に一台しかなかったというのも現実である。教会堂は中央広場の東側にあり、常駐の尼僧たちが毎日ミサを実施している。現在も常時使用されているということから、小さな補修はこまめに実施されているようだが、主レタプロのような大きいものには手が出せずかなり損傷が激しい。中央広場にむかって東方向に正面ファチャダがあり、このファチャダをはさむ二本の鐘塔のうち北側の塔は半壊したままである。ファチャダ円柱は猿やクイといった動物と果物や花などの植物を組み合わせた石彫彫刻が螺旋状の斜

めに上昇してゆくデザイン意匠になっている。内部は横置き礼拝堂が計五つつあり、各礼拝堂入口上部に文字記録が書かれていたが暗かったのと痛みが激しいことでもわかりに判読できる状態ではなかった。内陣と外陣部は階段で区別されている。身廊部はかつて屋根裏も含め全体に装飾壁画で覆われていたに違いない。現在はプルピトの置かれている場所の後ろ側の壁に壁画人魚図像が隠れていた。また主祭壇後方レタプロや外陣上部の窓枠にはかなり金装飾が残っており、バロック様式建築装飾で満たされた創建当時はかなり豪華なものであったことが推測された。一番興味をひいたのは身廊部北側で内陣が一番近い場所に置かれたレタプロで、明らかに地元の職人が独自の発想で作りに上げた、素朴ながら異色の構成になっている。ボベダは基本的にキンチャ構造だが木の小枝を使っており、漆喰の目止めは施されていない。北東方向を向いた内陣聖域外部壁にはムデハル式三点アーチに囲まれた屋外教会堂が併設されていた。このアーチのデザインはめずらしく、ベルーではもちろんのこと、屋外教会堂の宝庫でもあるメキシコでも唯一トラスカラ州トラスカラ市サン・フランシスコ修道院付属屋外教会堂の事例があるのみである。

(4) リヤクワ

手持ちの地図には記載がなく、アキラの町から同行し

タクスコ大学で人類学を専攻後、家業を継ぎながらアブリマク州の文化財保存と修復に貢献するマヌエル・プラド氏の案内でたどり着いた場所である。現在の人口は千五百人位らしいが、かつては銀山採掘で潤っていた。新旧二つの広場があるが教会堂は旧の広場の東側に面して建てられている。正面ファチャダは北側を向き、一つしかない鐘塔には四つも鐘が納まっている大きなものである。信者たちは広場にむかつて身廊部東側に開けられた扉から出入りしている。この東側ポルターダと正面ファチャダは共に十七世紀に伝えられたマニエリスモ様式で建造されている。平面プランは一身廊形式だが、内陣部分の東・西それぞれにかなり広い礼拝堂を設置している。ただしオリジナルの形状を残しているのは東側の礼拝堂で、西側の礼拝堂は最近の改修後、倉庫として使っている。内部を見ると、まず身廊部東側壁で内陣に一番近い所に置かれたニツチ・レタブロの南側下部に人魚像があった。倉庫からも人魚像と認識できる木彫像を一点、スズ材の彫金オブジェを一点発見したが、元々どこに設置されていたものかは不明である。この他コロの下部に施された壁画がかなり残っていた。

(5) パタワシ村の教区教会堂

パタワシもリヤクワ同様手持ちの地図には記載がなかった。リヤクワからは車で四〇分位の距離にあった村であ

る。一見して十七世紀に新しく入植したスペイン人植民者集団が自力で築いた村落であることがわかる。四角い広場の四辺部に沿って住居を建てて行き、いざという時は家屋部分が防衛壁になる都市プランで、格子状に交差する街路の外側も同様に住居の壁が必ず道路の塀を兼ねるような構成になっている。完全な形で残存している所は少なく、たとえばアメリカ合州国ニューメキシコ州チマヨ市などは稀有な例である。時空を越えて共通の発想があった。パタワシの教会堂の守護聖人はサンチャゴ・デ・マタモロスだがその図像を示すものはない。広場に面した西側正面ファチャダの意匠は興味深い。鐘塔は北西コーナーから五メートル位離れた場所に独立して建っているが地面に残った礎石の並び方を見ると元々は塔とファチャダの間に洗礼堂が建っていた形跡がある。正面ファチャダの前面に三連の丸アーチが設けられ、その下を通って中に入ってゆく。アーチをささえる円柱はエンタシスがかかっている。この円柱にもアーチ内外にも裝飾壁画が描かれていた。一部しか残っていないがサンチャゴ・デ・マタモロスの図像があったかもしれない。実に奇妙な設計なのだが、現在のファチャダ部分とアーチの間の距離(約五メートル)から推察するに、アーチから現ファチャダは元来は中二階にコロのあった空間ではなからうか。だから創建当時のファチャダはアーチ部分

を覆う形で作られていたはずである。アーチとアーチにはさまれた三角形の壁空間には人魚でなく天使像が四体描かれている。ただその顔の表象は太陽に目鼻をつけたような土着化したものになっていた。

(6) サント・トーマスの教区教会堂

行政区分ではクスコ州に入るが、クスコ市からのアクス道路はアプリアク州を通過するものを使うしかない位置にある。それでもアプリアク州とクスコ州の経済力の違いを見せつけられたようで、サント・トーマスがものすごい大都会に思えた。広場も周辺道路も舗装されており、レストランも数軒あった。サント・トーマス教区教会堂は一七八七年の創建で二本の鐘塔と翼廊、円蓋を持つ大規模なものである。教区区分ではクスコ教の管轄下にあるが、文化的には南のアレキッパ圏の一部であり、東方向を向いた正面ファチャダの装飾はアレキッパ・タイプの平面的で織物を広げたような様式に準じている。コルカ溪谷のヤンケ教会堂のファチャダ・イメージを彷彿させるが、扉左右に一对の石彫浮彫人魚像があった。

h. アヤクーチヨ地域

アヤクーチヨ州は美術文化遺産の豊富な場所であったが、一九八〇年代頃から反政府ゲリラの最大拠点として知られるようになり、安全面から観光客や研究者が気楽

に訪れる場所ではなくなっていた。州都アヤクーチヨを含め、この地域の情報がガイドブックから消えて久しいが、九〇年代後半からゲリラ事情も変わり、誘拐や殺されるような危険は激減した。それに伴って最近出版される観光案内などでも再び紹介されるようになり、州政府も空白の二十年間を埋めるべく観光誘致に本腰を入れていく。まだ三つ星以下のクラスのホテルしかなく、教会堂や先住民時代遺跡といった観光資源の整備も遅れているが、安い費用で長期生活できることから冒険心に富む若いバックパッカー達の人気は高まっている。基本的には農業州でメルカド（市場）には驚くほど多種の野菜や果物が格安の値段で売られている。

アヤクーチヨ市内には四七の教会堂建築があると言われている。ただ度々発生した地震のために十九世紀以前そのままの状態でも建っているものはなく、必ず修復の手が入っている。一九六〇年代までの研究者の調査でアヤクーチヨ植民地美術の全貌はほぼわかっており、基礎資料も充実しているが最近のものはない。人魚像があると認定されていたのはサンタ・マリア・マグダレナ教会堂のみだったが、今回の調査ではさらにラ・コンパニャ・デ・ヘスース修道院教会堂、サン・フアン・デ・デイオス教会堂、それに大聖堂でも存在が確認できた。

(1) サンタ・マリア・マグダレナ教区教会堂

創建は一五八八年だが、一八世紀に大改修が実施され、西方向を向いた正面ファチャダをはさんで建つ左右の四角い鐘塔で飛翔する人魚像もこの十八世紀改修時に新たに加えられたものだ。各塔に八体づつ、計十六体存在する。二体で一組になった石彫浮彫で、いずれにしても塔部に人魚像が存在する例はペルー国内ではここだけである。

(2) ラ・コンパニア・デ・ヘスース修道院教会堂

イエズス修道会の拠点だった所で、修道院部分は現在コレツヒオ(学校)として使われている。教会堂は二本の鐘塔と翼廊を持つ堂々としたものである。プルピトの演壇部を支えている肘木部分が木彫の人魚像となっている。移動可能な家具タイプで元々からここにあったものは断定できないが、ファチャダから入ってすぐのコロ下に信者の告白と懺悔のために使われる聴聞椅子が置いてあった。一般に懺悔のための家具は箱形をしていて、小さな扉をあけて中に担当司祭が入り、外から小さな窓を通して信者が告白内容を告げるタイプのものが多い、信者と懺悔者は直接顔を合わせないような構造になっているのだが、聴聞椅子は簡略化したものだ。ただ椅子の装飾は実に複雑・豪華で時間と手間をかけている。この椅子の装飾モチーフとして、特に膝まづいて告白する信

者の視線を受けることの多い座面から下の前面部分に集中して人魚像があしらわれている。

(3) サン・ファン・デ・ディオス教会堂

一五五五年創建と、アヤクチヨ市内では最古のキリスト教宗教建造物であるサン・クリストバル礼拝堂(一五四〇年創建)に次いで古い。北東方面を向いた正面ファチャダ上部には天使像があり北側の天使はギターを、東側の天使は笛をふいているが、十六世紀中期ではまだラテンアメリカにギターが持ち込まれたはずはなく、この部分は十七世紀以降の補修である。身廊部分で一番主祭壇に近い位置を占める左右のレタブロ上部のそれぞれ木彫人魚像があった。

(4) アヤクーチヨ大聖堂

本体は一六七二年の完成だが、内装は十八世紀のバロック様式である。しかその後塔を含めたファチャダ部分は十九世紀に大改修されている。三身廊プランの大規模な建造物で中央身廊前部に円蓋を持っている。中央広場に面して南東方向に位置する。北東側(右手)身廊部の壁に沿って四点のバロック式巨大横置きレタブロが置かれているが、それらレタブロの下から支えている柱部に各レタブロに二体づつ木彫人魚像があった。南西側(左手)身廊部の壁に沿ってやはり三点のレタブロが置かれていたが、このうち人魚像があったのは主祭壇に近い方の二

点であった。特に主祭壇の方から数えて二番目のレタブ
ロ下部の人魚像の表象はフラットで先住民風の顔つきを
したイメージになっている。

i. リマ市内

リマ市内の教会堂調査は三度目であるが、毎回目的が
違い、今回のように人魚図像に集中しての調査はもちろ
ん初めてであった。見慣れたはずの建築物からテーマか
らはずれるにせよ意外な新発見が沢山あったが、それら
については省略する。そもそも「銀の道」を中心に人魚
図像調査を始めた背景には、正統なものとして押しつけ
られてきたキリスト教図像への反発なり脱キリスト教化
の感性がアルト・ペルー地域先住民にあり、それがチチ
カカ湖周辺のアイマラ文化伝統やクスコ周辺のケチュア
文化伝統の人魚に相当する伝説上の存在の図像表現と結
びついて、アルト・ペルー地域文化のメステーション化のプ
ロセスの中で両義的な異形のシンボルとして登場したと
いう仮説が存在する。この意味ではフランシスコ・ピサ
ロの征服以来、スペイン植民地行政の中心都市として機
能してきたリマ市に人魚図像があまりあるとは思われず、
またあったとしても全く別の美術表現の文脈で考察しな
ければならないものはずである。とは言え、前述の仮
説を補強する意味でも比較研究のためにもリマ市内の植

民地時代建造物の装飾美術を検証する必要がある。とい
うわけで歩き回ることとなった。前回までの調査と文献
資料などで人魚像のありそうな所はリマ大聖堂、サント・
ドミンゴ修道院、それにラ・メルセー教会堂であると判
断した。

(1) リマ大聖堂

正確に言うとりマ大聖堂と横並びに同じブロックに建っ
ているサグラリオ礼拝堂と司教館である。どちらもアル
マス広場に面しているのだが、ファチャダには木製のア
ンダルシア風バルコニーを備えている。他のスペイン植
民地時代建築の中ではペルーの個性を最も発揮している
建築要素であり、その最上の事例がトルレ・タグレ館で
ある。サグラリオのバルコニーも司教館のバルコニーも
トルレ・タグレのものに匹敵する質のものだが、残念な
ことに二〇世紀の再製作である。注目したのは石造建築
本体から突き出したバルコニーを下から支える肘木の意匠
である。各バルコニーには六本の肘木支えがあり、それ
ぞれに前後にずれて二体づつ人頭像が彫られている。怪
獣でなければかなり怖い男性の顔である。西欧グルーテ
スコ装飾の応用であるのは確かだが、正統的なキリスト
教図像表現の一つというよりは逸脱の性格を強調してい
るようにはしか見えない。これをそのままマーマン（男人
魚）の表象、あるいはオリエント美術の表象に結びつけ

て語るのはあまりに我田引水の感がないでもないが、
故この画像表現が選択されたのかその背景を探る必要は
あるだろう。

(2) サント・ドミンゴ修道院

ペルーにおけるドミニコ修道会布教活動の拠点であつた。そのあまりにスペイン的な性格が強いために、かえつてスペイン美術の特殊性も移植されているのがこの建造物の特色である。まず修道院入口を入つてすぐ左手にある教会参事会会議室を見て見ると、天井はムデハル構造になつてゐる。ムデハルとはスペインのキリスト教建築に入り込んだイスラム美術の伝統表現で、抽象文様を寄木組構造で表現するものである。ラテンアメリカでは技術伝統がないのと費用のため、壁画で描き表すことも多いがこの参事会会議室天井は組木パネル構造である。回廊部に入つて見るとアーチの意匠や木という素材を使つてゐるためスペイン的ではあつても非西欧的な印象を受ける。パティオ部分や回廊部下回りにはタラベラ・タイルがフルに使用されている。タラベラ・タイルの敷設工事は一六〇六年に開始されたものである。色彩豊かに様々なモチーフが使われているが、その中に人魚画像がかなり混じつてゐる。彫像ではサン・マルティン・デ・ポレス礼拝堂の祭壇上部に二体の人魚立像が置かれてゐる。デ・ポレスは一五七九年よりペルーでの布教活動に従事

したドミニコ修道会士で、死後、聖人の列に加えられる。デ・ポレスの名を冠したもう一つの設備がオラトリオで、このレタブロ及び木製座椅子の下部を人魚像が支えている。

サント・ドミンゴ修道院の横には教会堂があり三身廊の大空間だが、左右身廊部の壁側には各五点、計十本の横置きニッチ・レタブロがある。三つの身廊部の空間はアーチ柱で区分されているが、そのうちの一本の柱（メモにはどの柱だったか記載漏れあり）に二体の石彫浮彫人魚像があつた。

(3) ラ・メルセー教会堂

リマ市セントロ地区で一番の繁華街といわれるウニオン通りに面してゐる。バロック様式ファチャダの存在感は周囲の世俗建築群を圧倒している。しかしファチャダに人魚はいない。一步中に入るとまずその装飾品の多さと大きさに目を奪われる。そして黄金色に輝くレタブロを一つ一つを確認してゆくと人魚の一大棲息地であることが判明する。但しその入身振りVはあくまで西欧風であり、メステイソ的な風情はない。西洋美術のパラダイムの中で脱西洋美術化を図つてゐるのだが、それがラテンアメリカ、あるいはより限定してペルーの土地風土、メステイソ的文化伝統の刺激を受けて脱一化を試みたのか、元々から脱一化を考えていたがこのペルーという

土壌で初めて受け入れられたということなのだろうか、疑問はつきない。

次年度のポリビア調査ではどのような人魚が出迎えてくれるか楽しみである。

(本文中、人名敬称は略しました。また調査地は本文掲載分の他にもまだありましたが入稿時までには資料整理が間に合わず、割愛した所もあります。)

参考文献リスト

*フィールド調査結果を踏まえた研究ノートのため、本文中明らかに文献資料の存在を示唆したり、参照結果であることが明らかな個所でも脚注を示さなかった。使用した文献情報の正確さや解釈の検討をまた実施していない理由に因る。以下に示す文献はフルト・ペー地域美術研究の基本図書の一部であり、論文類、新聞・雑誌記事などは含まれていない。

Alvarez Perca, Guillermo, Fr., "Historia de la orden dominicana en el Peru (siglos XVI-XVII)", 1997, Lima, Peru., "Historia de la orden dominicana en el Peru (siglos XVIII-XIX)", 1997, Lima, Peru.

Armas Asín, Fernando, "La construcción de la iglesia de los andes", 1999, Pontificia Universidad Católica del Peru, Lima, Peru.
Bayón, Damián, y Murillo Marx, "History of South American Colonial Art and Architecture", 1989, Rizzoli, New York, USA.

Den Berg, Hans Van, y Norbert Schiffrers, "La cosmovisión Aymara", 1992, UBC/HISBOL, La Paz, Bolivia.

García, Enrique Fernández, SJ, "Perú Cristiano", 2000, Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima, Perú.

Gisbert, Teresa, "Iconografía y mitos indígenas en el arte", 1994, Linea Editorial: Fundacion BHN, La Paz, Bolivia.

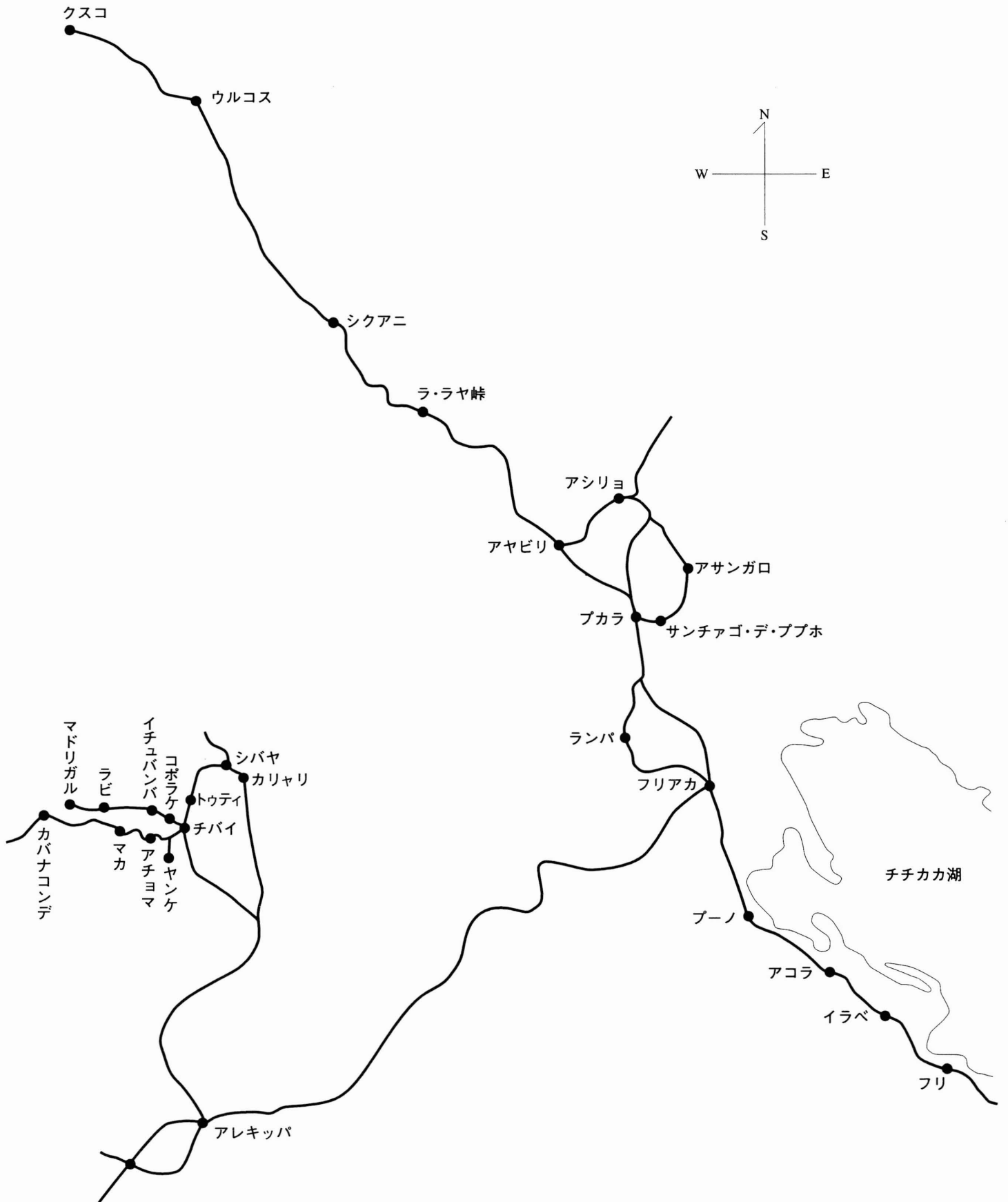
Lexus Editores, "Historia del Perú", 2000, Lexus, Barcelona, Spain.

Montes Ruiz, Fernando, "La mascara de piedra simbolismo y personalidad aymaras en la historia", 1999, Editorial Armonía, La Paz, Bolivia.

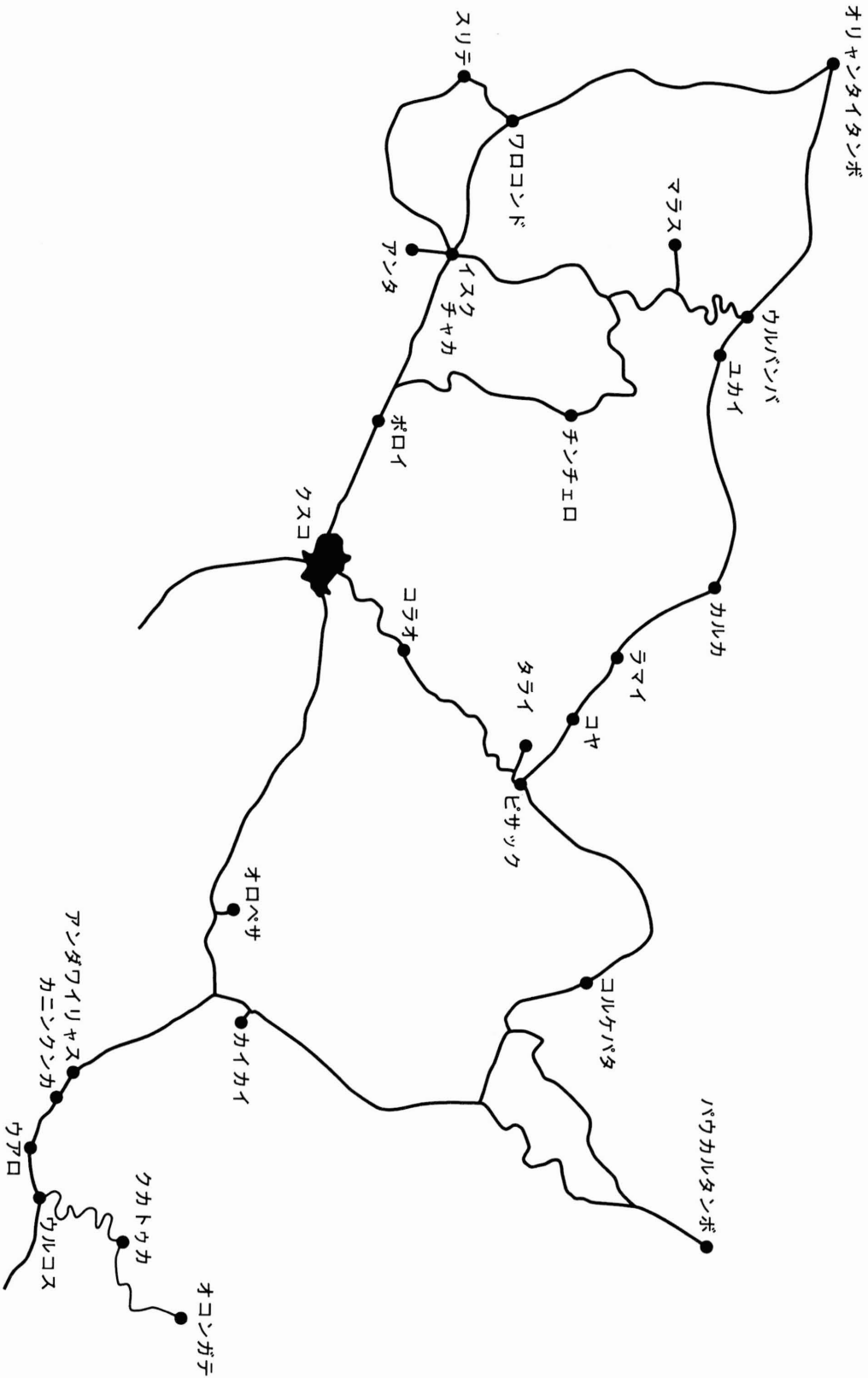
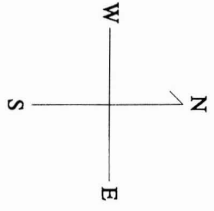
Pontificia Universidad Católica del Perú, ed., "Guía Turística del Departamento de

- Arequipa", 1995, PUCP, Lima, Peru.
- San Cristóbal, Antonio, "Esplendor del Barroco en Ayacucho", 1998, Ediciones Peisa, Peru,
- San Cristóbal Sebastián, Antonio, "Arquitectura planiforme y textilografica virreinal de Arequipa", 1997, Universidad Nacional de San Agustín de Arequipa, Arequipa, Peru.
- Sebastian, Santiago, "El Barroco Iberoamericano; Mensaje Iconográfico", 1990, Ediciones Encuentro, S.A., Madrid, Spain.
- Urbano, Enrique, comp., "Mito y simbolismo en los andes : la fultura y la palabra", 1993, Centro de estudios regionales andinos, Cusco, Peru.
- Zereceda, Oscar Chara, y Viviana Caparó Gil, "Iglesias del Cusco Historia y Arquitectura", 1998, Editorial Universitaria UNSAAC, Cusco, Perú.

クスコ～プーノ～アレキパ周辺地図



クスコ、バリェ・サグラドス周辺地図





「楽器を弾く左利きの人魚」17世紀。ウルユスの基所礼拝堂壁画（部分）
復原素描。制作者不詳。ベルタ・ベルミュデス・ソマリョア提供。



「羽毛飾りをつけた人形」18世紀。アソダウイリリヤスの教会堂壁画（部分）
復原素描。制作者不詳。ベルタ・ベルミュデス・ソアリオア提供。